Ⅱ　“教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

少人数学級編制
きめ細かい学習指導と教科担任制の充実
新庄市立明倫学園

１　本校の実態

本校は令和３年に小学校及び中学校の３校が統合し、県内２番目の義務教育学校としてスタートした。義務教育学校のメリットでもある１年生から９年生までの様々な形態での交流や、前期ブロック（１～４年)、中期ブロック（５～７年)、後期ブロック（８～９年）の３ブロック制を取り入れることによるリーダー学年を３回経験できる学校である。

また、低学年でも一部取り入れてはいるが、中期ブロックから教科担任制を本格的に導入している。このような環境の中、定数が改善された５年生とともに、少人数学級編制の対象となる６年生については教科担任制の充実を図っているところである。

２　実践

⑴　運用の方針

①　クラス数増加によるメリットを生かし、子どもたちに豊かな学びを保障するために教科担任制の充実を図る。

②　少人数を生かしたきめ細かい学習指導、生徒指導を行う。

⑵　具体的な取組み事例

①　教科担任制の充実

担任が一人増えたメリットを生かして、下記のように教科担任制に取り組んだ。（下図参照）

	標準時数	６Ａ	６Ｂ	６Ｃ
国語	175	６Ｃ担任	６Ｃ担任	６Ｃ担任
社会	105	中期教頭	中期教頭	中期教頭
算数	175	６Ａ担任	６Ａ担任	６Ａ担任
理科	105	６Ｂ担任	６Ｂ担任	６Ｂ担任
音楽	50	後期課程音楽教員	後期課程音楽教員	後期課程音楽教員
図工	50	後期課程美術教員	後期課程美術教員	後期課程美術教員
家庭	55	中期教務	中期教務	中期教務
体育	90	６Ａ担任	６Ｂ担任	６Ｃ担任
道徳	35	６Ａ担任	６Ｂ担任	６Ｃ担任
学活	35	６Ａ担任	６Ｂ担任	６Ｃ担任
総合的な学習の時間	90	６Ａ担任	６Ｂ担任	６Ｃ担任
外国語	70	専科＋６Ｂ担任	専科＋６Ｂ担任	専科＋６Ｂ担任

複数クラスで同単元の授業を展開する中学校教員は、即座に PDCA を繰り返すことで教材研究に深まりが生まれる。一方、担当教科数も多く、自学級で授業することが多い小学校教員は、同様に PDCA を行うことは困難であることが多い。本校では、少人数学級編制により３学級にしたことで、前期課程でも３回の授業を行うことができる。そのため、通常では自分の授業の検証を「同じクラスで違う単元」という形でしか行えない所を、「違うクラスで同じ単元」という比較で検証をすることができるようになり、その分教材研究に深まりが出た。

② きめ細かな学習指導

６年生は在籍が 71 人のため、本来であれば 35～36 人の２クラスとなり、それぞれの学習に寄り添うことが難しくなるところである。また、グループの数も９グループとなり、学級全体での交流時間の確保も難しくなる。しかし、少人数学級編制により 23～24 人の３学級になり、担任団が児童一人ひとりにきめ細かい指導を行い、学習の質の向上につなげてきた。

・ 算数　データの特徴を調べて判断しよう「データの調べ方」

メディア時間について自分のデータと学級全体のデータを比べる学習を行った。その際、自分のデータを分析した後に、グループ内での交流や学級全体での交流を通してデータ比較を行った。グループ数が少ないために、友達の分析にも目が向きやすくなり、データ比較を通して自分自身の生き方にまで考えを深めるなどの学びが展開された。

・ 理科　「水溶液の性質」

場所や器具が限られているため、人数が多いと児童が思考を深めるために十分に実験に取り組むことができない。しかし、少人数学級により、課題に対しての仮説を確かめる実験を存分にすることで、グループ内での議論が活性化し、児童自身が自己の学びを調整していく姿が見られた。

・ 体育　「水泳」

本人の泳力に合わせた班編成が可能になり、自分の課題に合わせた練習にたくさん取り組むことができた。教員もそれぞれの児童の実態を見取り、適切な指導や声がけを行うことができた。また、ボランティアの保護者と連携しながら、安全の確保に努めることができた。

③ きめ細かな生徒指導

すべてのクラスに入り、複数の目で子どもを指導することにより、小さな変化にも気付くことができ、情報を共有し、学年や担任以外の教員ともつながり相談することで、効果的な生徒指導につなげている。

３　成果（○）と課題（△）

○　クラスの数が増えることにより、教科担任制を行うメリットがさらに生かされ、教材研究の深まりが生まれた。

○　教科担任制を行うと２クラスよりも３クラスの方が、1 人の担当する教科数が減るため、授業の準備の負担も大幅に軽減され、働き方改革にもつながった。

○　少人数学級編制のメリットを生かし、子ども一人ひとりのニーズを把握し、関わることができた。

○　一つのクラスを多くの教員の目を通して見ることで、多様な観点から児童を観察・指導するため、児童理解が進み、生徒指導上の効果は高い。また、児童は様々な教員の関わりがあるため､悩みの相談などについても複数の選択肢があり､安心感が高い。

△　少人数学級編制により、教科の専門性が高まっているが、日常的に行われている後期課程の教員との意見交換をさらに活性化し、指導力の向上につなげていきたい。

少人数学級編制
個別最適な学びに向けた学習指導と生徒支援

庄内町立立川中学校

1　本校の実態

本校は全校生徒数 83 名（１学年 25 名、２学年 18 名、３学年 40 人）で、学級数は５学級（１～３年各１学級、特別支援学級２学級）であり、３学年が少人数指導教員の配置に該当する。学区内には認定こども園１園、小学校１校があり、10 数年同じ顔触れで生活しており、男女分け隔てなく仲がいいが、競争心や切磋琢磨する雰囲気が育ちにくい面もあると感じている。

本校の生徒は、授業では他者と関わりながら意欲的に取り組める生徒が多い。しかし既習事項の定着や理解度の差が大きく、基礎・基本の定着に課題がある生徒が多いため、授業者だけではきめ細かな指導や対応が難しい教科もある。

2　実践

⑴　運用の方針

①　英語学習において定着度や理解度に差が見られるため、全学年において全授業でＴ.Ｔ指導を行い、基礎学力の定着を図り学力向上を実現する。

②　担任を含めた複数教員による生徒支援を行うため、1 学年の副担任として配置し、中一ギャップを未然に防止し、生徒の心の安定を図る。

⑵　具体的な取組み事例

①　生徒の実態に合わせたＴＴ指導

【Ｔ２による机間指導】

Ｔ１がメインティーチャーとして授業を進めＴ２が机間指導を行い、課題把握に戸惑っていたり、課題解決の途中でつまずいてしまったりしている生徒に対して、個別の支援を行う。教員が２人で指導にあたることで、生徒に声がけできる人数や回数が増え、適切な支援につなげることができる。

ペア活動やグループ活動においては、活動の充実に向けて機会を逃すことなく助言をしている。特に、ペア活動においては、Ｔ１とＴ２が模範を示すことで、生徒はイメージしやすくなり、活動の活性化につなげることができる。

【学級を等質２分割した授業】

３学年は 37 名おり、一人ひとりを見取ってきめ細かな指導を行うことが難しいため、学級を２つのグループに分けて授業を行う。そうすることで、少人数指導が可能となり、より丁寧に生徒の実態を把握し指導に反映させ、わかる授業を展開することができる。また、授業の途中や終わりに形成的評価を適切に行うことで､生徒の実態によって授業展開を修正したり次時の授業に反映させたりして、

わかる授業につなげることができる。また、指導者同士で生徒の反応、理解度やつまずきを共有することで、指導者の研鑽にもつなげることができる。さらに、英語の授業ではペア活動や教え合いが有効であり、学級を等質２分割することで、活動の活性化が見込める。

② 担任業務の軽減

どの学年も１学級（通常学級）であり、学級経営に関する業務を担任同士で分担することができない。そのため、担任業務の負担が１人の教員に集中する傾向にあるが、少人数指導教員が業務の一部を担うことで解消している。具体的には、テスト計画に向けたワークシート作成や提出物の取りまとめ、給食指導等を行い担任を支援している。

③ 多様な視点による生徒理解

中学生は多感な時期であり、悩みや心配事を抱えている。しかし、悩みや心配事を聞いて欲しいという思いを持ちつつも、誰にでも話せるわけではない。担任には話しづらい生徒も少なからずいる中、担任ではない少人数指導教員に対しては抵抗なく話せる生徒もいる。担任だけではなく多くの教員が生徒に関わり、思いを受け止めることは大切であり、生徒理解を深めることで適切な生徒支援につなぐことができている。また、少人数指導教員が知り得た情報については担任と共有することで、複数教員による支援が実現できている。

３ 成果（○）と課題（△）

○個別最適な学びの実現

学級の実情に応じた柔軟的なＴ．Ｔ指導により、生徒個々の状況を捉え、適切に支援することができた。学期末に行った授業に関するアンケート結果を１学期末と２学期末で比較すると、英語の理解度については「２年生：27.8%→61.1%」「３年生：61.2%→88.9%」と上昇しており、理解度が増したことが分かった。理解度の高さやわかる授業が意欲的な学習につながり、好循環を生み出した。

○生徒と向き合う時間の確保

担任業務の軽減により、生徒と向き合う時間が確保され、個々に寄り添った生徒支援や多様な視点による生徒支援ができた。いじめについては早期に発見して対応することができ、円滑に保護者と連携をとり解消することができた。また、本校の不登校生徒数の出現率は、令和５年度の県の数値を大きく下回っている。担任業務を軽減することで心にもゆとりができ、「生徒のよいところ」だけでなく、「生徒を認めようとする視点」で適切な声がけや支援をすることができた。

△特定教科での支援に限定

今年度は英語の教員が配置され、多くの成果を挙げることができた。しかし、全国学力・学習状況調査やＮＲＴでは他教科にも課題が見られたが、持ち時数の関係や中学校で教える内容の専門性から、英語での支援に限定されてしまった。通常学級における特別な支援を要する生徒の増加もあり、複数人数・複数教科の配置が実現できれば、さらに個別最適な学びを推進することができ、きめ細かな支援ができると考える。

特別支援学級 学級編制基準の引き下げ
少人数を生かし、個の自立を目指す

河北町立谷地中部小学校

1　本校の実態

本校は児童数 382 名、通常学級が 14 学級、特別支援学級が４学級（知的２、情緒２）で計 18 学級である。内、５年生が 68 人で少人数学級編制弾力化加配により３学級、特別支援学級のその他の障がい（情緒）が７人で特別支援学級弾力化加配により１組が３・４年生４人、２組が５年生３人の２学級となっている。

学校教育目標は「Challenge＆Thinking」。今後 10 年先、20 年先の未来を拓いていく中部小の子どもたちが、どんな状況にも柔軟に対応し、豊かな人生を生きていくために、「人生 100 年時代の社会人基礎力」として注目されている「前に踏み出す力」「チーム力」「考え抜く力」の３つの資質・能力を学校教育目標の重点に置いている。

2　実践

⑴　運用の方針

①　個々の自立を目指し、障がいに基づく困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うために少人数編制の利点を生かした自立活動を行う。

②　「個人推し活」総合探究学習を学年全体の計画に合わせて、テーマや目的により個人または学年との交流で探究活動を行う。その際に、学年の担任と支援学級担任が複数で見取り、支援する。

⑵　具体的な取組み事例

①　学級の実態に応じた自立活動の実践

実践例

１組「サーキットコースを作り楽しもう」
　　「生き物を飼って育てよう」
２組「ボードゲームをしよう」
　　「ペーパークラフトで遊ぼう」
合同「野菜を育てよう」「窓ふきをしよう」

【野菜の苗植え】

・心理的安定、人間関係の育成、コミュニケーションが主だが、学級の実態に応じて６区分 27 項目から必要な活動を行う。

・個に応じた支援については、個別の支援計画・個別の指導計画やその時々の実態から担任間で常に共有して進める。

【ペーパークラフト】

児童

ペーパークラフトは３人の好きなものを先生がいろいろ準備してくれて、楽しく活動できた。

教師

１組では４人それぞれの実態に応じて、目指す姿やそのための手立てが異なるため、少人数になったことで一人ひとりに、よりきめ細かい支援がしやすかった。

② 複数で個を見取る「個人推し活」総合探究学習

ねらい

学校教育目標「Challenge＆Thinking」の具現化に向けて、重点を置いている３つの資質・能力の育成に向けた一実践として、学ぶことの楽しさを味わわせるとともに、自分でめあてを持って課題解決する力を育てる。

育成を目指す資質・能力

ア　自ら進んで、願いや目標を持って課題に取り組むことができる。（前に踏み出す力）
イ　類似課題を協働したり、個別の課題でも友だちの課題解決方法を参考にしたりしながら取り組むことができる。（チーム力）
ウ　学びを活用し、問題に直面したときに自ら考え判断し行動できる。（考え抜く力）
★課題設定⇒情報収集⇒整理・分析⇒まとめ・表現の探究サイクル

実践例（特別支援学級）

・犬の種類やしつけの仕方
・サッカーのスキルアップ（ドリブル・シュート）
・自動車の車種やメーカー　・車の部品について
・メダカの研究（観察・飼育）
・プログラミング・新幹線の型調べ
・折り紙の達人

【メダカの卵を観察】

【研究のまとめ】

児童

自分の興味あることをとことん調べたり、好きなものを作ったりするのが楽しい時間だった。

もっと調べたい、うまくなりたいと思った時に、学年の先生が多いので得意な先生にアドバイスをもらってできた。

教師

特別支援学級の子どもたちは、こだわりが強く、好きなことに没頭できる個人総合はぴったり。学年で多くの目で子どもたちを見取ることができたのはよかった。

３　成果（○）と課題（△）

○　特別支援学級の子どもたちは特に、それぞれの特性が強く、その実態に応じて目指す姿やそのための手立てが異なるため、少人数になったことで一人ひとりに対してよりきめ細かい指導・支援ができた。子どもの自立にもつながった。

○　少人数編制で可能になった複数教員による指導・支援の利点をヒントに、地域ボランティア(前特別支援学級支援員)からの支援も子どもたちの向上につながった。

○　２組３人と同学年の５年生も少人数学級編制の弾力的加配であるため、体育や宿泊学習等、学年全体の活動でも一人ひとりの子どもをきめ細かく支援できた。

△　通常学級にも医療機関から ADHD の診断や薬を服用する子ども、配慮・支援を要する子どもがとても多い。さらなる支援体制を整えていきたい。

小学校低学年副担任制
多人数単学級の中で一人ひとりを見取る指導体制の確立

鶴岡市立藤島小学校

１　本校の実態

本校学区は藤島地域の中心部であり各学年複数学級を維持してきたが、近年の児童数減少により、多人数単学級となる学年が生じることが続いている。

学校規模は、全校児童数 264 名、特別支援学級２学級を含む全 13 学級である。２学年以上は学年２学級編制であるが、現１学年は 35 名の多人数単学級であり、今年度１年生副担任として非常勤講師が１名配置されている。

２　実践

⑴　運用の方針

①　幼保小連携や市の就学支援との連携を図り、特別支援教育の理念に基づく個に応じた支援を行う。

②　入学時からのスタートプログラムを計画し、１年生は４～６月を４時間授業とする。単位時間と教育内容を考慮し、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図る。

③　担任と１年生副担任非常勤講師との連携により、複数の目による児童の状況把握を行い、安心・安全な学校生活を保障する。

④　複数の目による児童の実態把握を生かした個別支援を行うことで、確かな学力の育成や学習意欲の向上を図る。

⑤　多人数単学級の教室環境を考慮し、空き教室を活用した学習環境を構築する。１年生教室の隣に学習室を設置し、生活科等の学習活動によっては、担任と副担任が連携した見守りを行うことで、十分な学習活動の場を確保する。

⑥　担任と副担任による複数の目による観察に基づき、保護者への細かな情報提供や連携を図る。

⑦　教員業務支援員との連携も図り、多岐にわたる１年生担任業務をサポートし、担任が児童の指導に専念できるようにする。

⑵　具体的な取組み事例

①　児童の個別支援（特別支援教育への対応）

１年生多人数単学級の場合、個別支援が必要な児童への対応を担任一人で全て行うことは難しい。今年度、副担任が配置されていることで、担任が学級全体の指導を行うと同時に副担任が個別に対応することができた。担任と副担任が役割分担をしておくことで、学級全体の活動支援と個別支援を継続的に両立することができる。

また、毎日同じ指導者が同様の対応をすることで、児童や保護者の安心感もあり、入学後から小学校生活に慣れるまでに効果的に支援することができた。

②　登校時・下校時の対応（身支度・学習用具の整理・保護者からの依頼への対応）

登校時刻から１時間目開始までの時間帯は、登校時に配慮を要する児童への対応や、登校後の身支度や提出物の処理等、担任の業務は多岐にわたる。特に１年生の年度当初は、個別の対応が必要である。この時間帯に副担任からの支援が入ることで、複数の目で児童を見守り、安全・安心を確保しながら担任業務を行うことができた。登校時の遅参児童への対応、下校時の保護者引き渡しにも確実に対応できた。

③　教科学習における TT 指導

教科学習においても、毎時間継続的にＴ．Ｔ指導が行えることの効果は大きい。学級全員の学習状況を把握していることで、タイムリーな個別支援を行うことができる。担任が一斉指導を行っている時の個別支援では、机間指導を細やかに行うことにより一斉指導の進度に遅れがちな児童に適切に支援することができた。一斉指導後の個別の習熟確認の時間では、担任と同時進行で確認し直接指導をすることができた。1 単位時間の授業終盤で 1 年生 35 名に個別対応することは困難であるが、副担任と分担することで細かな教科指導が可能になった。

④　ノート点検

連絡帳や各種カードの点検は毎日の担任業務である。１年生多人数単学級の場合児童の対応に常時追われるために、点検の時間を確保することは難しい。副担任が点検することで、担任が児童への対応を確実に行うことができた。

⑤　暗唱チェック・計算カードチェック

授業時間外の休み時間等に，詩の暗唱や計算カードの習熟を個別に確認しているが、多人数でも担任と分担することで短時間での確認が可能になった。

⑥　教室と学習室に分かれて行う指導

教室の隣の空き教室を１年生専用の学習室としている。普通教室に１年生 35 名の机を配置すると、それだけで教室内に空きスペースがなくなる。机間指導の通路の確保さえも不十分な状況である。生活科、図工、算数的活動、学級活動、行事のための練習等で児童の学習活動の場を確保するために、また、学習の少人数指導の場を確保するために学習室を活用している。その際に、非常勤講師である副担任が別教室で指導できることは大きな利点である。担任の指導に基づき副担任が別教室で指導することで、学習が効果的に推進し、同時に児童の安全・安心が確保できる。

⑦　給食指導

１年生多人数単学級では、給食の準備・配膳にも大きな労力と配慮が必要になる。担任一人では指導が困難である。給食準備・片付けのために、教室隣の学習室も活用し副担任と分担して準備を行うことで、効率的で安全に給食指導を行うことができた。

⑧　休み時間の教室での見守り

担任は校務分掌に係る連絡対応や、授業の準備等で教室を離れなければならない時間がある。副担任が教室で児童を管理することで安全を保障することができた。

３　成果（○）と課題（△）

○　前述のとおり、１年生の多人数単学級に非常勤講師としての副担任が配置されることで、学習指導・生徒指導の保障、児童管理における児童の安全・安心が保障できた。

○　指導をする担任、サポートをする副担任のように役割分担が確立することで、児童の不安に応えることができた。児童にとって担任と副担任が心の拠り所になっている。

△　副担任は非常勤講師のため勤務時間が短く児童下校後にすぐに退勤しなければならない。そのために、児童下校後に担任と副担任との間で打合せの時間が取れない。児童の状況理解と指導方針の共有，学習教材準備や学習評価補助の時間を確保したい。

別室学習指導教員
生徒一人ひとりが安全安心を感じられる別室を目指して
米沢市立第三中学校

１　本校の実態

本校は米沢市の西部地区に位置し、「自立への道」を校是に掲げ、「いのちの教育」に重点を置き、学力の充実と生徒会活動の充実に努めている。

明るく素直な生徒が多く、学校の諸行事を始め、部活動やボランティア活動にも意欲的に取り組んでいる。反面、自分をうまく表現できない生徒、基本的生活習慣が十分身についていない生徒もいる。近年は不登校生徒が多く、本校の大きな教育課題となっている。市の教育支援センターや民間支援団体と連携しながら「誰一人取り残すことのない令和の日本型学校教育」「生徒指導の実践上の視点『安全・安心な風土の醸成』」の具現化を目指し、日々教職員で不登校生徒への可能な支援を探っている。

２　実践

⑴　運用の方針

①　別室利用生徒が安心して学習に取り組むことができるように、別室学習指導教員が別室に常駐し指導にあたる。

②　別室学習指導教員が別室利用生徒の様子を校務システムや日誌を活用してまとめ、管理職をはじめ全職員と情報を共有し、チームで支援にあたる。

⑵　具体的な取組み事例

①　安全・安心を感じられる居場所づくり

昨年度まで、教室に入ることができない生徒は、登校後に職員室で出席報告を行い、自分でスケジュールを立てて自学を中心に学習を行っていた。その時に対応できた職員は、空き時間の教員や養護教諭が中心であった。今年度は、基本的に別室学習指導教員が別室に常駐し、登校してきた生徒を待ち受けるようにした。生徒と対話し、思いを汲み取りながら一日のスケジュールを立てることが可能となり、生徒の安心感が高まり、継続的な登校につながった。この継続的な登校により学習の定着が図られ、通常の授業の進度に追いつき、部分的な参加ではあるが学級での授業に取り組めた生徒もいた。さらに、学校生活全般に長期的な見通しを持ち、目標設定を行うことが可能となったため、生徒会行事等へ本人なりに参加することにつながり、自信や充実感、在籍する学級への所属感を持つ好循環も生まれた。

また、年度当初に別室学習指導教員と養護教諭、教育相談担当が話し合い、多くの職員が少しでも生徒と交流が持てるようにすること」「学習に取り組んでいる生徒が職員に質問しやすいようにすること」「希望に応じてオンラインで教室の授業を受けられるようにすること（昨年度までの教室は Wi-Fi 環境が未整備）」の３つが可能になるように職員室に一番近い教室を別室とした。このことにより、別室を利用している生徒が学習プリントを携え職員室に行き質問したり、空き時間の教員が別室に行き学習指導をしたりする姿が多く見られるようになった。別室学習指導教員が、コーディネーターの役割を担い、担任、教科担当と情報共有を図ったことによるものが大きいと考える。

その他、別室学習指導教員がいるおかげで、これまで以上に別室を利用している生徒の安心・安全を確保することができた。例えば、「隣の教室棟の廊下から見られ

ているようで…」と不安を口にした生徒の声を聞き、翌日までには別の教室からブラインドを移設したり、生徒がいない間に机の配置等が変わっていることに対する別室登校している生徒への不安感に気づき、他の生徒の活動や教職員の会議に別室を利用しないようにしたりした。別室を利用している生徒が「気になる」「不安を感じる」ことについてはできる限りの配慮を行うことを全職員で確認した。

② チームで別室生徒を育てる

別室学習指導教員は、別室に登校した生徒のその日の様子について校務支援ソフトや日誌を利用し、全職員が情報共有できるように記録を作成した。別室学習指導教員の勤務が 15 時までとなっていることや、生徒が別室を利用する時間はほぼ別室学習指導教員が別室に常駐していることにより、放課後や空き時間に会議や打合せが出来ず、生徒についての情報共有が課題であった。別室学習指導教員が別室で過ごす生徒の細かな見取りを行い、校務システムの生徒の様子を記録するツールや日誌にまとめることにより、会議や情報共有の時間が持てない課題を埋め、生徒の適切な支援をチームで行えるようにした。

また、養護教諭が日常から別室に足を運び、別室学習指導教員と情報共有を図り、記録だけでは伝わりにくい生徒の様子を把握し、担任や学年主任に伝え、適切な支援を行えるようにするなど、別室学習指導教員とともにコーディネーターの役割を担った。別室学習指導教員や養護教諭は「〇〇さんが今登校しましたよ」と担任や所属学年の職員に声をかけ、生徒と担任、学年職員が顔を合わせられるようにした。職員室の座席についても養護教諭と別室学習指導教員の机を隣接させ、細かな時間でも情報共有し、生徒にとって必要な支援を検討し、全職員に伝えていくかを協議できるようにした。

③ 市の教育支援センターとの連携を密にする

別室利用生徒の中には、市の教育支援センターにも通っている生徒がいる。多くの生徒は様々な原因から不登校となり、学校に復帰するまでの間、市の教育センターに通っている生徒である。この生徒が安心して学校復帰を果たせるように、別室学習指導教員がこまめに市の教育支援センターの指導員と連絡を取り合い、生徒が抱えている課題や必要な支援の共有を図った。市の指導員が生徒と一週間のスケジュールを立てる中で、生徒が学校生活に対して不安を抱えている内容を別室学習指導教員に連絡したり、学校での支援体制を伝えたりするなど、生徒の登校復帰に向けた不安解消を図った。軌道に乗ってからも、市の教育支援センターと同じ方向性で支援できるように定期的に連携を図っている。

3 成果（〇）と課題（△）

〇 別室学習指導教員が別室に常駐し担任のような役割を果たすことは、生徒の安心感、学習や学校生活への意欲につながり、不登校から学校復帰できた生徒が増えた。

〇 マンパワーの不足や職務の多忙の中、別室学習指導教員の生徒の細かな見取りを全職員で共有したことで、生徒が抱える課題や不安に適切な支援を行うことができた。

△ 様々な学びの保障が叫ばれる中ではあるが、別室の環境充実が進むことで生徒の在籍する学級復帰への意欲の高まりが課題となっている。

教科担任マイスター制度　小学校教科担任マイスター
外国語教育の充実と令和の日本型教育の実現に向けた実践

天童市立津山小学校

１　本校の実態

本校は、児童数 96 名、８学級（特別支援学級２）の小規模校である。学校教育目標「他と協働し、自らくらしを創造する子供を育成する」の具現化のために、６年間の教育課程で育みたい資質・能力を明らかにし、目指す子どもの姿を「ちょうせん（自ら学びを創る子供)」「つながり（つながりを大切にし共に伸びる子供)」「思いやり（健康でたくましくしなやかに生きる子供)」として、全職員が協働的に教育活動を行っている。

教科担任マイスター制度は、３年目である。今年度は、外国語の教科担任制を推進することを目的に取り組んできた。これまでも、第３学年以上の担任が創意工夫し授業を行ったり、週１回のＡＬＴとのＴ．Ｔによる学習を行ったりしてきたが、系統性のある指導や学習の積み上げなど授業構想において課題が見られた。

また、令和の日本型教育の実現に向けて、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るために、子どもの主体的な学びを促す授業実践についても、深い教材研究に基づく授業づくり、子どもの自主的な学びを促す環境づくりなどにおいて課題がある。

外国語における教科担任制推進のためのコーディネート、令和の日本型教育の実現に向けた学習スタイルの構築など、本校の学校教育目標の具現化を目指して、教科担任マイスター制度を活用している。

２　実践

⑴　運用の方針

①　６年担任が教科担任として５・６年の外国語の授業を担当し、必要感のある課題の提示や系統性を踏まえた授業づくりを行うことで、外国語教育の充実を図っていく。また、外国語の授業を自ら公開したり、他の担任の授業に助言を行ったりすることで、ＯＪＴの実効性を高めていく。

②　教科担任マイスターは、教務主任が行い、打合せの時間の確保や時間割の調整などを行うことで、担任、教科担任、研究主任等と連携しながら、令和の日本型教育の実現に向けた学習スタイルの構築を目指していく。

⑵　具体的な取組み事例

①　系統性を踏まえた外国語の授業実践

・教科担任マイスターは、教科担任が５・６年の外国語の系統性やこれまでの子どもの学びを整理し、深い内容研究に基づいた授業を日常的に行うことができるように体制を整えた。

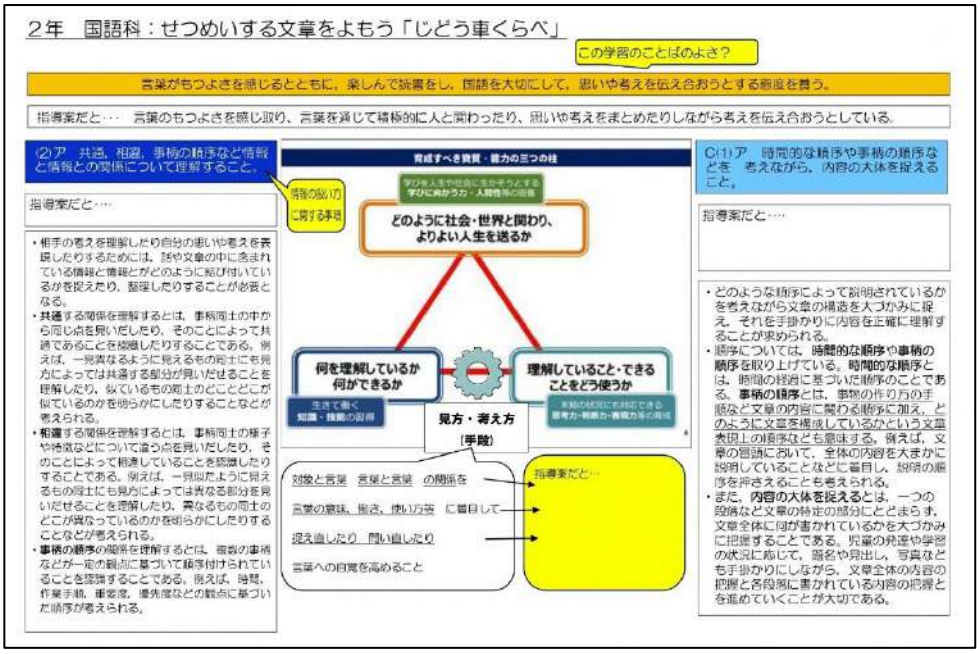
・５年「ＡＬＴと天童市のおすすめスポットへレッツゴー」、６年「ＡＬＴに自分のおすすめの料理を紹介しよう」などの単元では、教科担任と連携して２学年を関連付けて教材研究を行った。また、７月の「山形大学工学部の留学生との交流学習」では、５・６年合同で班を編成し、日本語がほとんど分からない７名の留学生に学校案内をする実践を行い、子どもが外国語について主体的に学びを深められるような場を意図的に設定した。

・山形大学附属小学校と教材研究や事後研究会を行ったり、教科担任が山形大学附属小学校の研究授業のコメンテーターを務めたりするなど、連携を図りながら外国語の授業の充実を図るようにした。

② 令和の日本型教育の実現に向けた様々な学習スタイルを用いた授業実践

・教科担任や担任等が、共に授業づくりや教材研究ができるように、共通の空き時間をつくり時間割を調整した。また、様々な授業で担任外の協力が得られるように人的体制を整えた。

・教科担任マイスターと研究主任は、単元づくりのスタートから担任と授業づくりを行った。その際、学習指導要領に示された教科の目標をしっかり押さえ、単元で子どもに育成すべき資質・能力や教科としての見方・考え方を明確にして、単元を構想できるようにした。（下図）。



・教科担任マイスターが、基礎基本の知識・技能において定着率が低い４年算数「整数の除法」や５年算数「異分母の分数の加法、減法」において、本単元や前学年の学び直しができるよう教材を作成し、授業を行った。

・単元内自由進度学習として、昨年度作成した教材・教具などを基に、新たな単元の環境づくりをしたり、修正してよりよい教材にバージョンアップしたりして、子どもの自主的な学びが促されるように単元内自由進度を実践した。

・子どもが進める授業として、６年社会科の学習について、他教員の参考となるように授業公開の機会を設定した。本時だけでなく、先生役となった子どもが教材研究や模擬授業をしている様子も参観するなどし、子どもが進める授業について継続的に教職員間で共有できるようにした。

３　成果（○）と課題（△）

○外国語の充実に向けた教科担任制を導入することで、教科の専門性が高まり、教師も子どもも主体的に学び、学力を高めることができた。

○研究授業だけでなく、日々の授業でも学習指導要領を踏まえた教科の深い内容研究に基づいた単元構想を行うことで、子どもの資質・能力の育成を図ることができた。また、教科の目標を踏まえた上で教科横断的に授業を行うなど、担任のカリキュラム・マネジメント力も向上した。

○教科担任マイスターは、外国語だけでなく他教科でも助言したり、共同して環境を整えたり、学習タイルを提案したりすることができた。

△教科担任制の取組をさらに持続していけるようなシステムや環境を整えることが課題である。

教科担任マイスター制度　小学校教科担任マイスター
教科担任制の推進と日常のＯＪＴの活性化

新庄市立日新小学校

１　本校の実態

本校は、児童数 503 名、25 学級（特別支援学級７学級を含む）、教職員数 51 名の最上地域における大規模校である。学校教育目標「自律・尊重・志」のもと、「支え合いながら、学びを深める児童生徒の育成　～学びの空間づくりを通して～」を校内研究主題として、「児童が疑問をもち、夢中になって学び続ける姿」を目指した授業づくり、授業改善を核とした日々の教育活動にあたっている。

教育活動の充実は、毎日の授業の質の向上を意味するものであり、そのためには、深い教材研究のための物理的な時間の確保が必要不可欠である。また、教員間の年齢差が大きい中で、経験年数の浅い教員の数が年々増え続けており、自らの指導に自信を持てなかったり、一人で悩みを抱え込んでしまったりする者も少なくないことから、日常的なＯＪＴの活性化も急務である。

本校には、豊かな経験や多彩な専門性を持つ多くの教員が在籍している。そのような大規模校だからこそ、個々の力量に任せるのではなく、そのスケール・メリットを最大限に生かして「チーム（組織）」として諸課題に向き合い、共に高め合っていくことで、日々の教育活動をさらに充実したものになるよう、本主題を設定し、以下のような実践を積み重ねてきた。

２　実践

⑴　運用の方針

①　教科担任マイスターが中心となって、校内の教科担任制を積極的に推進する。指導する教科数を削減・焦点化することで、授業づくりの基盤である教材研究の時間を従来以上に確保するとともに、より専門性を生かした指導によって、学習に対する児童の興味・関心や学習意欲を育むことができるようにする。

②　教科担任制による学年・学級経営の特色を生かし、学年「チーム」としての体制づくりとＯＪＴの日常化を図る。各学級に担任団を始め、複数の教員が関わり、協働的に指導・支援等を行うことで、児童と教師、教師と教師の間の多様なつながりを醸成するとともに、日常的できめ細かなＯＪＴが実現できるようにする。

③　教科担任マイスターと研究主任が密に連携しながら、校内研修や日々の授業づくりの質の向上を図る。授業研究を、個々の授業者ではなく、チームとして（組織的に）取り組んでいくことで、共通の課題意識や教材理解のもとでさらに質の高い授業を児童に還元できるようにする。

⑵　具体的な取組み事例

①　ダイナミックな「教科担任制」の推進

本校は各学年３学級、３人の担任教師をもって構成されている。そのような特色を生かし、各々が３学級分の複数の教科指導を受け持つ「教科担任制」を実施した（図１）。

<table>
<tr><th colspan="2">学級</th><th>国語</th><th>社会</th><th>算数</th><th>理科</th><th>音楽</th><th>図工</th><th>家庭</th><th>体育</th><th>道徳</th><th>総合</th><th>外国語</th></tr>
<tr><td>5-1</td><td>担任A</td><td>A</td><td rowspan="3">B</td><td rowspan="3">A</td><td rowspan="3">D</td><td rowspan="3">E</td><td rowspan="3">B</td><td rowspan="3">C</td><td colspan="2">F</td><td>A</td><td>A</td><td rowspan="3">C</td></tr>
<tr><td>5-2</td><td>担任B</td><td>B</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="2">C</td><td>B</td><td>B</td></tr>
<tr><td>5-3</td><td>担任C</td><td>C</td><td>C</td><td>C</td></tr>
<tr><td colspan="13">D：専科教員　E：OJT支援員　F：教務</td></tr>
</table>

図１「教科担任制」による各教科の指導者（第５学年を例として）

また、ＯＪＴ支援員を教科指導者として活用したり、その他の専科教員や教務主任等の担任外の教員による指導も組み合わせたりした結果、担任１人あたりの指導教科数は右の例のようになった（図２）。

指導教科数を従来に比べて大幅に削減したことで、それぞれの教員が持つ専門性や強みをより生かした指導が可能になった。また、指導教科が絞られたことで、１つの教科あたりの教材研究にかける時間が確保されるだけでなく、より深く充実した研究や授業準備も可能になり、毎日の授業の質の向上につながった。

図２　担任１人あたりの指導教科数の変化

②　ＯＪＴの日常化

上記①の取組みは、授業の質の向上の他に、教師個々人ではなく学年「チーム」として学年・学級経営にあたることや、ＯＪＴをさらに日常的・普遍的なものとして根付かせることを意図したものである。「１人で自分の学級をみる」のではなく、「３人で３学級をみる」意識や考え方を日々共有してきた。実際に、各担任は毎日のように３学級の児童と触れ合い、３学級の経営に関与することになる。経験年数、専門性、強み（弱み）も異なる３人だからこそ連携することで、組織的かつ柔軟に学習指導や生徒指導にあたることができた。何事に対しても、学級の枠を超えて、経験年数の浅い若手教員を含む学年団３人で「共に」そして「自分事」として、目の前の課題に向かい、思いや考えを伝え合い、実践し、喜びを分かち合ったり新たな課題を見出したりしてきた。このように、多様な教員と常に「つながっている」環境の中で、「チーム」として試行錯誤しながら自己研磨した日常こそが、効果的なＯＪＴとして価値付けられるのではないか。

③　校内研修との連携　～「ゼロベース」の授業づくり研究会～

「０（ゼロ）から１（イチ）を」、「みんなで授業づくりを」等々を合言葉に、指導案等の事前準備を必要としない「ゼロベース」の授業づくり研究会を、校内研修と連携しながら促進してきた。「０（白紙の状態）」だからこそ、経験の有無や専門性に関係なく、自由闊達に疑問やアイディアを出し合ったり教材を持ち寄ったりすることができ、児童の興味・関心や意欲を高める授業づくりが進んでいった。また、後日完成した指導案をもとに、参加した教師各々が実際に授業を行い、相互に参観することで、児童や教師の様子を丁寧に省察し、よさを認め合い、自らの指導へと生かすことができた。この積み重ねが、「チーム」としての校内研修の活性化や授業力の向上、そしてＯＪＴへと結びついていった。

写真１　放課後の授業づくり研究会の様子

３　成果（○）と課題（△）

○　「教科担任制」のよさや手応えを、実践した教員一人ひとりが実感している。授業の質の高まりにも確実に寄与してきた。

○　「チーム（組織）」として、支持的な教師間のつながりや関係性の中で、学年・学級経営や校内研修の充実化、ＯＪＴの日常化を図ることができた。

△　「教科担任制」の推進に対する不安感を持つ担任もいる。成果を積極的に発信・共有する一方で、それらの声を丁寧に扱い、より効果的な手立てを探っていく。

教科担任マイスター制度　中学校教科担任マイスター
確かな学力を育成するための教科担任マイスターを核とした授業改善の取組み

飯豊町立飯豊中学校

１　本校の実態

本校は全校生徒 153 名、特別支援学級２学級を含む８学級の中学校である。

学校教育目標

・自ら考え、判断、表現し、主体的に学ぶ力を身につけた生徒
・自尊感情と社会性を身につけ、郷土を愛し、地域に貢献する生徒
・「いのち」をつなぎ、自ら体力を高め、たくましく生きる生徒
・「グローカル」の視点を持ち、SDGｓを生活の一部にできる生徒

のもと、「自ら考え、表現、判断し、主体的に学ぶ力を身につけようとする生徒の育成」を学校研究主題として、日々の実践を積み上げている。

本校の実態として、数学科において個々の苦手意識や学力差が大きいこと、また、粘り強く考えず指示待ちの生徒が多いことが挙げられる。教科担任マイスターが数学科をタテ持ちとし、複数の数学科教師の配置によりＴ・Ｔや少人数指導を生徒の実態に応じて柔軟に取り入れ、教師主導の授業から生徒同士が互いに関わり学び合う授業、学習課題を自分事として主体的に取り組む授業を目指し教科担任マイスター制度を活用している。また、教科担任マイスターが研究主任を兼ねることで、校内全体の授業力向上、生徒の学力向上につなげている。

２　実践

⑴　運用の方針

①　教科担任マイスター（数学科）がタテ持ちし、系統性を意識した主体的・対話的な授業を行うことで、他の教員の指導力の向上、生徒の学力の育成を図っていく。

②　教科担任マイスターが研究主任を兼ね研究をリードすることで、研究主題の実現に向けた取組みを推進する。

③　飯豊町の重点教育である小中連携を出前授業や集合学習等を通し推進する。また、小学校教員との授業構想の共有し、９年間を見据えた算数・数学の学力向上を目指す。

⑵　具体的な取組みの事例

①　数学科を出発点とした授業改善

タテ持ちでの授業により､生徒が１年生から３年生にかけて身に付けるべき資質･能力を系統的に指導できることにつながった。また、単元のはじめにゴールを示した後に個別最適な学びと協働的な学びを実現する「単元内自由進度学習」に取り組んだ。目的意識を持って自力解決する姿、ゆるやかな教え合いや話し合いの姿が自然発生的に起こり、達成感を生徒自身が感じることができていた。また、自ら計画を立て、責任をもって学習を進めることで、主体的な学びの姿勢が継続できていた。

１回目の校内授業研究会で、教科担任マイスターが授業提供を行った。単元内自由進度学習を他の教員に示すことは、生徒の学習効果を高めるだけでなく、教員の

専門性向上や学校全体の教育環境の改善にもつながった。

2学年　数学

自由進度学習のススメ

＜自由進度学習とは？＞
学習での全員が同じペースで同じ問題を解く、そして全員で答え合わせをする一斉授業とは違い、一人ひとりに合ったペースで、自分に合った方法で学習を進めていきます。その時間の課題を自ら選択・決定し、計画を立てて進めていきます。
自分のため、自分たちのために、自ら学び方をつかむことは、社会にでてからも大切な力です。時間を使め、クラス全員でチャレンジしていきましょう！

＜目的＞
※自身に学びのある１時間にする
※自分の学習スタイルを探究し、学習の人生に生かしていく
※自分の分かる、分からない各時間に、自分で学習計画を立てられるようになる

＜１時間の流れ＞

目安時間	内容
5分	1　学習計画を立てる。 ロードロノートに今日やることを書く。(題：明朝　前：少しは配　由：自配（予定より遅れているもの）)
35分	2　重点をまとめたり、問題を解いたりする。 ・自分で　・教科書で　・教師で　・友達と　・先生と
	3　答えを確かめる。間違っていたら、修正箇所を決して理解する。
	4　学習のまとめ（ポイント）をチャート紙に書く。
	5　練習問題を解き、丸つけをする。（自分の理解度をチェック（しよう））
10分	6　振り返りを書く。（振り返りを発表したり、聞いたりする。）

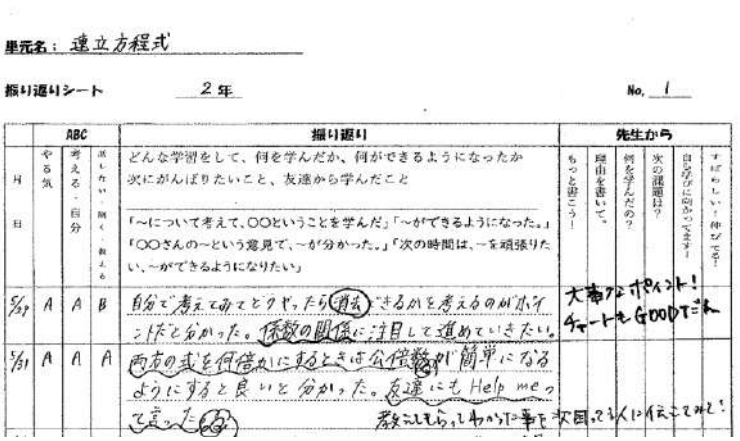
＜約束＞　※やるだけ、よりよい速度にアップデートしていきましょう！
○授業の始まり、終わりの時間は守りましょう。準備ができた人は、あいさつより先に始めてもOK。
○授業プリントには、自分なりの疑問を書いてみましょう。（つぶやいたり、どんどん進んでもOKです。）
○チェックテストは自分の理解度をチェックすることが目的です。間違ったところは再度、復習するようにしましょう！
○一人で考えて「？？」のところは友達や先生に相談し求めましょう。
○答え合いでは「自分だけこの答っているか」「自分は「科学の原理」に従り乗って答えを求めましょう。
○友達と学習すると楽しい「嬉しい（うれる）」よりも「楽しい」であるかどうかが大事にしましょう。
○学習活動がはやく終わった人は、チャレンジ活動から、自分に合った課題を選んで挑戦しましょう！

誰かが⇒自分が⇒自分たちが「みんながわかる」を「みんなでつくろう」！

「え、何で？？」「どういうこと？？」「あ、そういうこと！」「だったら…」

やんしで「help me」が言える教室に

自由進度学習の目的、約束をまとめたプリント


単元名：連立方程式

振り返りシート　2年　No. 1

	ABC			振り返り	先生から					
	やる気	考える	話し合い・聞く・教える	どんな学習をして、何を学んだか、何ができるようになったか 次にがんばりたいこと、友達から学んだこと 「～について考えて、○○ということを学んだ」「～ができるようになった。」「○○さんの～という意見で、～が分かった。」「次の時間は、～を頑張りたい、～ができるようになりたい」	もっと聞こう！	理由を書いて。	何を学んだの？	次の課題は？	自分だけ分かってダメ！	すばらしい！伸びるぞ！
月 日										
5/27	A	A	B	自分で考えてみてとくやったら(消去)できるかを考えるのが小テストだと分かった。係数の関係に注目して進めていきたい。	大事なポイント！ チャートもGOOD！					
5/31	A	A	A	両方の式を何倍かにするときは公倍数が簡単になるようにすると良いと分かった。友達にもHelp meって言った(笑) 教えてもらってわかった事を次回ってみんなに伝えてみて！						

自己評価や振り返りを毎時間記入し、教科担任から具体的なアドバイスを伝えることで、生徒自身の学びの調整や意欲の高まりにつなげている。

②　学校研究の充実

全国学力・学習状況調査の結果を分析し、生徒の実態を把握した。それをもとに校内研究を通して生徒に付けたい力、迫るための授業での具体的な手立てを提案し共通理解を図った。また、生徒の実態を把握し、手立ての有効性を検証するため、定期的にアンケートを実施した。

さらに、一人ひとりの教員にとって校内研究が自分事となり学びにつながるよう、個人実践に取り組むことを提案し、校内研究を核とした日々の授業改善につなげた。

学校研究　今年度の個人の実践
【①自分で考え工夫する②自己調整③協働的な学びをすえた授業実践】

氏名

1　実践した時期　※どちらかに☑（クリックすると☑がつきます）
☐ 通年（1年を通して）
☑ 重点単元を設定　単元名
2　具体的な実践（手立てや工夫したことなど）　※箇条書きでも可。
・課題設定の工夫を行い、（参考（5・7・8）の可能性を広げることが、学びの意欲をもつ。解決に、仲間を作り投稿する。
・（参考）（一例）：「縦2階の関係が一緒考が来り」の授業を考え、区別するところを明確にし明確定し自分の考えを持つ。同じ意見同士、その後に繋り意見同士で交流を行い、学びの幅や可能性（自分の考者の可能性）を広げる。
3　成果（○）課題（◇）（子どもの変容、各種テストの結果や振り返りの記述から）

氏名

1　実践した時期　※どちらかに☑（クリックすると☑がつきます）
☑ 通年（1年を通して）
☐ 重点単元を設定　単元名
2　具体的な実践（手立てや工夫したことなど）　※箇条書きでも可。
・振り返りシートを活用し、全員に毎回を授業の振り返りを行わせる。また、単元の終わりには単元のまとめプリントを活用し、知識の獲得だけでなく単元ごとの振り返りも行わせる。
・毎回の授業で設定した課題に関する【予想】の時間を設ける。授業の終わりには【予想】の時間に立てた仮説と結果の比較を行わせる。
3　成果（○）課題（◇）（子どもの変容、各種テストの結果や振り返りの記述から）

氏名

1　実践した時期　※どちらかに☑（クリックすると☑がつきます）
☑ 通年（1年を通して）
☐ 重点単元を設定　単元名
2　具体的な実践（手立てや工夫したことなど）　※箇条書きでも可。
・協働的で対話的な活動を授業に取り入れ、生徒同士、生徒と教師、生徒と第3者、生徒と記憶機器などの多種な者種の交流を工夫する。
・生徒一人一人の実態に応じて、一人学びの時間を設定し、個別関連な授業展開をする。
3　成果（○）課題（◇）（子どもの変容、各種テストの結果や振り返りの記述から）

「今年度の個人実践」として教員が取り組む具体的な実践内容をまとめた冊子を作成。

③　小中連携に係る取組み

６月に本校を会場に学区内の４つの小学校に授業を公開した。また、学区内の小学校６年生対象の「小６集合学習」を中学校で実施。中学校数学につながる算数の授業や既習の知識を応用した課題解決学習を小学生に提供するとともに、小学校教員が９年間を見据えた授業構想の共有や効果的な指導法を学び算数・数学科における小中連携を深めることにつながった。

３　成果（○）と課題（△）

○　教科担任マイスターが研究主任を兼ねることが校内のＯＪＴの活性化につながり、「個人の実践」の取組みを通して、一人ひとりの授業改善につながった。

△　小中連携については、中学校教員が小学校に継続して訪問し、系統性を踏まえた授業づくりや指導方法について共通理解を図れるよう改善する必要がある。